



九月に寄せて

コンスタンシオ・コンスルタ神父

酷暑の夏もこの頃には終わり、人々は夏の日々を過ごした場所から戻ってくる時期でしょう。「夏が過ぎ去った9月に会いましょう。楽しい時を過ごし、でも夏が過ぎ去ったらその思い出とともに（私のところに）戻って来て下さい。」と歌にもあります。

他のすべての通常典礼暦のように、9月には特別なキリストの神秘に焦点を置いたものはありませんが、すべてにおいてキリストの神秘を視野に入れています。私たちは福音を通してキリストの生涯をたどり、またイエス様の教えとたとえ話を通し、それらがキリストに従う私たちにとってどのような意味を持つのかということに注目します。典礼祭日は17あり、そのうちの4つは日曜日の主日にあたるため、主日の典礼となります。

人間は霊と肉体の両方を持つものであることから、教会は人の日常生活に必要なものを与えてくれます。教会の典礼と祭日は年間の四季（春夏秋冬）に様々な面で反映されています。8月、9月、10月と11月は収穫の季節であり、またキリスト者として神の私たちへの変わることの無いご保護を思い起こし、その年の収穫に感謝するのです。

かつて9月には四季大齋日があり、特に収穫の終わる時期に神に感謝を捧げる時期でした。四季大齋日は祈りと断食と慈善のために設けられたそれぞれの四季の初めの3日間（水、金、土曜日）です。12月13日の聖ルチアの祭日後（冬）、四旬節の最初の主日後（春）、聖霊降臨の主日後（夏）、そして9月14日の十字架称賛の祭日後（秋）が四季大齋日で、これらの週が「四季」として知られていました。

5世紀以来、四季大齋日は司祭叙階式に望ましい日でもありました。したがって、この時期には教会は以下の3つの点に焦点を当てていました。(1)祈りと断食と慈善を通して神に向き合うことによりそれぞれの季節を聖なるものとする。(2)それぞれの季節の種々の収穫を神に感謝する。(3)新たに叙階された司祭や将来の司祭召命や信仰生活のための祈り。

1969年の第二バチカン公会議以降のローマ暦の改革により、四季大齋日は原則としては残されましたが、いつどのように行われるのかはそれぞれの国の司教会議の裁量のもとにあります。今日では四季大齋日の決められたミサ教本はもはや存在しないのです。

2018年9月の教皇様の祈りの意向

アフリカの若者たちが、自国で教育を受け、自国で働く機会を得ることができるよう。